

参加者の感想

1. 2021年度参加者

幌延地層研究センター見学を経て

10月26日、高レベル放射性廃棄物処理の最終処分場選定で揺れる寿都町長選が行われた。1135票対900票と僅差ではあるが最終処分場推進派である現職の片岡氏が当選することとなった。ちょうど先日幌延の地層研究センターを見学させて頂いた私にとってタイムリーなことであり、また驚きでもあった。原子力関係の事業について市民の理解を得ることは難しいと考えていたからである。

先日、北海道を訪れた初日、地層処分の事前勉強会としてNUMOの方にその概要をお聞きした後、「どうすれば放射性廃棄物の処理について自分事として考えるようになるか」ということをテーマにいくつかのグループに分かれ話し合った。私のグループでは、「エネルギー省（原子力省）」を設立することで知名度を高めるといった意見となったが、言うだけならば簡単であり、自分たちからはアプローチすることのできない他人任せにしてしまう意見となってしまったように思う。他にもいくつか意見が出たが実現可能性と実効性、持続性を合わせ持つ意見は出なかった。多くの人々へ知ってもらうことの大変さを改めて気づかされる事となった。

2日目には実際に地層処分について研究を行っている、幌延地層研究センターを見学させて頂いた。見学前は地層処分場の地震耐性に懐疑的であったが、見学を終えて定量的な値をお聞きし、耐えることができそうだと感じた。しかし、幌延地層研究センターの地下施設は本来想定している規模と比較しかなり小規模であるため、大規模化したときの影響も考慮する必要があると感じた。また、100年規模の事業になると聞き、そこまでかかるか疑問であったが、実際に見て100年、もしくはそれ以上かかるのではないかとも思えた。高レベル放射性廃棄物の処理を地層処分に委ねるならば、候補地の選定を急ぐ必要があると改めて感じた。

今回の地層処分研究センターの見学を経て、高レベル放射性廃棄物の地層処分の安全性についての理解が深まったように思う。しかし、この問題について理解してもらうことの難しさが浮き彫りとなったようにも感じた。先日処分場推進派の町長が再当選した寿都町の住民は、自分が住む町が処分場候補地となったがために地層処分について学び、決断をした。だが、私を含むその他の地方に住むものはどうかというと、原子力や放射性廃棄物などの単語だけで忌避感を持つ人や、中にはそれ以上何を言っても情報を拒絶してしまうような人、そもそも興味を持たない人もいるだろう。東日本大震災による原子力発電所の被害を見れ

ば仕方がないともいえるが、“核のゴミ”問題はもはや急務であり、地層処分含む最終処分方法について賛成、反対はともかくその概要、リスクの程度について無関心ということはあってはならない。私個人としては、科学的特性マップにおいて適当とされる地域については国益と考え文献調査を行うなど、過剰なまでの保証をセットとして本問題に関わらせるなども致し方ないと思う。最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださった原子力文化財財団様、NUMO 様及びシニアネットワーク様に深く感謝致します。

幌延地層研究センター見学を経て

今回の幌延深地層研究センター見学会に参加してことで得た知見及び感想について以下述べていきたいと思う。まず、見学会の一日目に地層処分事業が地域に受け入れられるためにはどのようなことが必要なのかというテーマのもとディスカッションを行った。多数の意見が飛び交う中で、これが最も深刻な問題だという共通認識に至ったことがある。それは地層処分事業を進めるにあたり、原発関連事業の先駆けとなるべき政治家を筆頭に国民全体が原発関連事業を理解し、解決に向かって取り組んでいこうという気構えが全くないのではないかということである。それだけではない。2011年に発生した東日本大震災による福島県での原発事故以来、国内での原発関連企業に対するバッシングは年々強まっているように思える。実際、脱原発や地層処分事業の中止に関する公約を掲げて、当選のための食い物にしている政治家は枚挙にいとまがない。この事実が示すのはつまり、それだけ原発関連事業に対して国民は後ろ向きなのである。それもよく原発関連事業の重要性を理解していないにも関わらず頭ごなしに否定しているきらいがあるため、ことさらたちが悪い。これでは地域民の理解が得られずに、いくら放射性廃棄物処分に関する技術的課題をクリアし、安全な処分地の選定を行ったところで思うように地層処分事業が進んでいかないのではないだろうか。この問題を解決することは容易ではないように思うが、個人的には学生などの若い世代への教育活動に力を入れることが解決の糸口になるのではないかと考える。若い世代は新しい考え方を柔軟に問い入れようとする姿勢があることに加え、そういった若い世代の認識が変わり社会にでていくことで原発に関する風潮がきっと変わるはずである。

二日目は幌延深地層研究センターの視察を行った。実際の研究施設を見ることで地層処分事業に関して一層の理解が深まるとともに、高レベル放射性廃棄物処分の安全性を確認することでできたと思う。特に、炭素鋼から形成されるオーバーバックとベントナイトから形成される緩衝材による人口バリアの実物大のモデルはとても迫力がありよかったと思う。しかし、研究施設を見学して個人的に疑問に思ったことがある。それは、4兆円という予

算に加え、高水準の研究施設を要しているにもかかわらず日本がいまだに文献調査の段階に留まっていることである。すでに処分場の建設を開始や処分地の決定を行っている他国が多く存在する現状を鑑みると、日本の地層処分事業は遅れているのではないかと個人的に思う。この問題を解決するには、やはりディスカッションのテーマのように国民一人一人が地層処分事業を自分事として考えるという意識を持つことが必要なのだと痛感した。そのためには、企業や国が先導して国内での啓蒙活動をしていかなければならないと思う。そして地層処分事業の認知が進みこの問題が解決するように、私自身も微力ながら力添えできれば幸いだと今回の見学会を通して思った。今回このような貴重な機会を与えて下さった原子力文化財団様、NUMO 様及びシニアネットワーク様に深く感謝致します。

幌延地層研究センター見学を経て

事前勉強会（場所：稚内）

初日は原子力発電所の使用済み燃料の最有力処分方法である、地層処分について原子力環境整備機構（NUMO）の方々からお話を伺った。お話を伺う中で感じたのは、地層処分の認知度の低さと風評被害の可能性である。認知度の低さに関しては、2017年に公表された科学的特性マップを利用して、全国各地で説明会を実施しているとのことだったが、参加者は毎回数十人と、決して多いとはいえない数字だった。風評被害に対する人々の懸念は、福島第一原子力発電所の事故以来、より敏感になっていると言える。これに対しては、地層処分の安全性や処分地として受け入れ後も責任を持って対応していくことを説明しているとのことだった。地層処分の処分地として誘致することは悪い点ばかりが取り上げられがちだが、フィンランドとスウェーデンの処分地周辺では、300～900名の雇用創出が見込まれており、地層処分が地域経済に与える影響は大きい。今後は、地層処分事業のプラスとマイナス面を考慮しながら、自治体や地域住民への理解を深める方法を模索する必要があるだろう。

幌延地層研究センター見学会（場所：幌延）

二日目は国立研究開発法人日本原子力研究開発機構（JAEA）が、地層処分の研究開発拠点としている幌延地層研究センターを訪れた。今回は地下250mの調査坑道を見学させて頂いた。まず驚いたのが坑道の幅広さである。私のイメージでは、10人程度が収まるくらいに思っていたが、実際には20、30人は優に収まるくらいの幅だった。また、実物大のPEMを見ることができ、その人工バリアの厚さと大きさから、高レベル放射性廃棄

物の危険性を改めて感じた。それだけでなく、一体の PEM を搬送から搬出するまでに様々なハイ レベル技術が利用されていることを知り、地層処分がどれだけ重要な事業で安全性に留意 しているかも感じられた。さらに幌延地層研究センターは、地層処分の研究を行う重要な 役割を担っているだけでなく、見学に訪れた人に幌延町の魅力を伝えるパンフレットを配布するなど、地域の PR にも一役買っていることがわかった。

まとめ

今回の事前勉強会及び幌延地層研究センターの見学に参加し、地層処分に対する理解が深まったと共に、高レベル放射性廃棄物の処分に関して、他人事ではなく自分事として考える良い機会になったと思う。また、地層処分は風評被害などを招くというマイナスなイメージもあるが、周辺地域の雇用や地域の PR などプラスの面も併せ持つ事業であり、今後はそれらを踏まえた上で慎重に議論を進める必要があるとも感じた。最後に、今回このような機会を与えて下さった原子力文化財団様、NUMO 様及びシニアネットワーク様に深謝致します。

2. 2020年度参加者

若者と地層処分を学ぶ会（東北） 日本原燃見学会を終えて

世界中で新型コロナウイルスが流行っている中で、このような見学会を開催して頂き、有難うございました。2日間という短い間ではありましたが、貴重な経験になり、自分の成長に繋がるものになったと自負しております。

1日目はNUMOさんより、「高レベル放射性廃棄物の地層処分について」というテーマのもとで講演して頂き、その中で私は地元である青森県東通村に処理場を建設できないか検討したことはあるのかという質問をしました。それは東通村は日本原燃のある六ヶ所村の隣村で輸送が容易で、海にも近く、停止はしていますが東通原子力発電所があることから村民の理解を比較的得やすいのではという意図のもとでした。また処理場ができれば、村のPRと活性化になるという思いもありました。しかし、青森県には処理場は作らないという約束事があるということで実現が難しいと知りました。北海道で2か所が文献調査を受けていると聞きましたが風評被害があるとわかり、対策がないか考えました。加害者はある程度原子力に知識と興味を持っており、時間がある人が多いと思います。そのため、今は建設できないかと直接回り限定的に説明会を開催しているものを、YouTubeを利

用し、より多くの方に原子力発電とはどういうもので、どのような安全策を行っているのかなどといったことや、スウェーデンのように処分場にするとどのようなメリットがあるのかというプラスの考え方を広めていかなければいけないと感じました。

2日目は実際に様々な施設を見学し、中でもPRセンターでSTAFFさんが処理場は絶対にできると信じて地層処理に関する説明をしているところを見て、30～50年で完成させるという約束事は果たさなければいけないものだと実感しました。他にもガラス固化体や貯蔵施設を見学し、安全策が十分に行われているということを実際に目で確認することができ、貴重な体験になりました。台風対策で見学できないところや石油備蓄基地に入れないということがありましたが、それ以上に多くのことを学ぶことができ、満足しています。

原子力発電は私の生活においてとても身近なものであり、将来的にCO₂をゼロにするという政府を見ると必要不可欠なものになると確信しています。今回学んだことを自分なりに周囲の人に伝え、今後の原子力発電のあり方を良い方向へと変えられるように貢献していきたいと思います。

最後に貴重な体験をさせて頂き、本当に有難うございました。